＃子育て処方せん

早めの治療で瘤回避

今回の「＃子育て処方せん」は、原因がいまだ解明されていない川崎病を取り組む福岡市立こども病院川崎病センターのセンター長、保科隆之医師に話を聞いた。

川崎病

川崎病は報告者の川崎富作医師から名前が付いた。患者の多くは4歳以下。全身の血管、特に体の末端にあるような細い血管に炎症が生じるのが特徴だ。手足や唇、舌などが赤く腫れ、むくみや発熱、首のリンパ節が大きくなるなど体のあちらこちらに異常が起こる。

特に注意しなければならないのは、心臓の筋肉に栄養を送る冠動脈に炎症が起こって変形し、瘤と呼ばれるこぶができる恐れがあることだ。瘤が大きいと血液の流れがよどみ、血栓ができやすくなる。冠動脈瘤破裂や心筋梗塞の原因にもなる。

一般的に発症の1週間～10日後くらいで瘤ができ始めるため、5日目頃までに治療を開始するのが望ましい。免疫グロブリン製剤という炎症を鎮める薬を投与すると多くの患者で炎症は治まる。それでも改善しなければ、別の薬の投与や血液を体外に抜き出して炎症を起こす物質を取り除いて体内に戻す「血漿交換」が必要となることがある。

原因は特定されていないが、感染症や環境中の物質などが引き金になって発症することが多いとされている。人種によってかかる子どもの比率が違う。日本を含むアジア諸国では、4歳以下で10万人当たり200～300人が発症するが、欧米ではその1割程度だ。何らかの遺伝的な背景があると考えられている。

解明されていないことが多い病気ではあるが、発症しても早期に適切な治療を始めれば、ほとんどの場合は後遺症もなく成長していく。基本的に小児科医なら誰でも診断や初期の対応はできる。発熱や目が赤い、発疹が出ている、手足が硬くむくんでいるといった症状が重なっているようであれば、まずは早めにかかりつけ医に相談してほしい。

（聞き手　大森祐輔）

保科隆之医師

川崎病にみられる症状のチェックリスト

- □ 発熱がある
- □ 両目が充血する
- □ 唇や喉、舌が赤く腫れる
- □ 首のリンパ節が大きくなる
- □ 全身に発疹や紅斑が出る
- □ 手足が赤く腫れたり、硬くむくんだりする

5項目以上当てはまる場合、川崎病が疑われる

※保科医師への取材に基づき作成

小児患者家族　支える滞在施設

自宅から離れた病院に長期入院が必要になった子どもに付き添う際、家族が低額で滞在できる「ファミリーハウス」。経済的にも精神的にも大きな負担を強いられる家族を支える施設となっている。

福岡市立こども病院の敷地内にある「ふくおかハウス」はシャワー付きの21部屋と、共用の台所や洗濯機などを備える。利用料は1人1泊1000円。全国各地に同様のハウスを展開する公益財団法人「ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン」（東京）が運営している。

こども病院には、心臓病や川崎病といった高度医療を必要とする小児患者が九州・山口各県などから通院・入院する。2023年は623家族がハウスを利用し、7割以上が県外在住者だった。

利用者からは「集中治療室に入って何が起きるか分からない状況で、すぐに駆けつけられる施設があり感謝している」「不安が大きい中、スタッフに優しく声を掛けてもらい、少し気持ちも明るくなって落ち着いた」などの声が寄せられている。

寄付金や利用料を主な財源に運営しており、清掃などはボランティアが担う。ハウスマネージャーの舛元啓二さん(62)は「家族が少しでもホッとできる場所になれば」と語る。

認定NPO法人「ファミリーハウス」（東京）によると、ハウスは全国に約130か所、九州・沖縄に約20か所あり、ボランティア団体や病院、闘病に付き添った経験がある家族らが運営に携わっているという。

福岡市立こども病院（右奥）の敷地内に立つ「ふくおかハウス」

感染症など、発症の引き金に

「＃子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール（s-syaka1@yomiuri.com）へお願いします。

インタビューの動画はQRコードを読み込んでください